



Title	ブラジル社会・文化における「内なる他者」としてのファヴェーラ
Author(s)	北森, 絵里
Citation	ブラジル研究. 2009, 5, p. 9-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106449
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジル社会・文化における 「内なる他者」としてのファヴェーラ

北森 絵里

はじめに

ファヴェーラ (favela) とは何か。この問いは単純に見えるが多くの問題を含んでいる。というのは、この問いに答えるには、単に、ファヴェーラを定義するだけで事足りるわけではないし、統計的な数値を示して説明すれば十分というわけでもない。もちろん、これらも答えの一部分をなすが、問題はもっと複雑である。なぜなら、ファヴェーラとは何か、という問いは、ファヴェーラがブラジル社会においてどのように位置づけられてきたか、そしてファヴェーラがブラジル文化においてどのような意味を持つかという問題に繋がるからだ。さらに、この問題について考察することは、ブラジル社会・文化が、植民地時代から近代化以降も継続的に抱えてきた、ヨーロッパ的価値と非ヨーロッパ的価値の関係をどのように構築してきたかという問題に繋がる。いや、もう少し正確に言えば、ヨーロッパ的価値が非ヨーロッパ的価値とどのように「折り合い」をつけ、前者が後者をコントロールしてきたかという問題に繋がると言えよう。

ここで「ファヴェーラはどのように位置づけられてきたか」という時、「位置づけられてきた」という受動態的な表現を用いたのには理由がある。ブラジル社会の成り立ちと有り様を見れば、ファヴェーラは、支配層との不平等な関係の中で価値づけられ、被支配的に地位に置かれている。ブラジル社会において主流となっている、ファヴェーラについての言説や価値づけは、支配層が主体となってファヴェーラを客体化することによって成立してきた。当然、ファヴェーラの側は、一方的に被支配的な立場に甘んじてきたわけではなく、不平等な関係の中で、支配層に対して「主体的に」関わり、能動的に自ら存在している。しかし、ファヴェーラとは何かという問いに答えるには、まず、ブラジル社会において、ファヴェーラは支配層によってどのように位置づけられてきたか、その有り様を押さえる必要がある。したがって、本稿ではまず、支配層によるファヴェーラの社会的文化的位置づけについて考察する。

ヨーロッパは、大航海時代に新世界を「発見」し、そこに住む人びとを「未開」「野蛮」な他者として認識することを通じて、自己を形成してきたことは、多くの研究者によって指摘されている。「文明」であるヨーロッパにとって「他者」とは、ヨーロッパ外部の世界に存在する「野蛮」である。しかし、ブラジルをはじめラテンアメリカにおいては、ヨーロッパは、新世界を植民地化し、他者である「野蛮」な人びとを征服することによって、「文明」を移植しようとしたが、結局、形成された社会は、ヨーロッパ的価値を基盤としながらも、「野蛮」である「他者」が外部に存在するのではなく内部に存在する社会になった。つまり、「他者」を抱え込む、すなわち社会の内側に他者がいる、「内なる他者」を抱える社会となった。

ブラジルの近代化において、近代化を推進する支配層にとって、この「内なる他者」は、先住民、元奴隷の黒人、混血の人びと、非識字者、零細農民などの近代化を疎外する「内なる野蛮」として常に問題視された。支配層は、ブラジルをヨーロッパと比べた時にどうしても立ち現われるブラジルの後進性を「内なる他者」と重ね合わせた。しかし、「内なる他者」は排除できない。

排除したくても排除できないから「内なる」存在なのである。外部の「他者」なくしてヨーロッパの自己が成立しなかったように、「内なる他者」なくしてブラジルの支配層の自己規定は不可能であった。

このような「内なる他者」の1つが、リオデジャネイロのファヴェーラである。ファヴェーラの存在は、支配層のアイデンティティに深く関わっている。近代化の象徴であり最先端の首都であったリオデジャネイロにおいて、近代化にそぐわないファヴェーラが存在することは、支配層にとって排除すべき「問題」であったが、結局、排除は実現できず「内なる他者」としてのファヴェーラを含有する近代化を進めるのである。

支配層は、近代化とともに出現したリオデジャネイロのファヴェーラをどのように位置づけてきたか。本稿では、リオデジャネイロのファヴェーラの社会的な位置づけと文化的な意味について考察したい。

1. 狭義のファヴェーラ

ポルトガル語辞典（通称「アウレリオ」、Novo Aurélio、32版）によると、ファヴェーラとは、「（一般的に丘に）粗末に建てられた、衛生を欠いた住宅」となっている。また、国連人間居住計画（UN-HABIT）は、ブラジル政府によるファヴェーラの定義を採用して、リオデジャネイロのスラム(slum)のタイプ／公式の定義／非公式の定義をそれぞれ分けて提示している。少し長くなるが、簡潔にまとめられているので紹介したい。

リオデジャネイロのスラムのタイプの1つとしての「ファヴェーラ（スクォッター居住地）」：インフラを欠いた土地に何の計画も無く、貧困者が自力で建てた住宅が広がる、公共の土地あるいは私有地を集団で占拠すること。

公式の定義：ブラジル地理統計院（IBGE）によると、標準以下の居住地（スラム）とは、インフラと基本サービスを欠いた、第三者が所有する土地に、密集して無秩序に建てられた、50軒以上の住宅の集まり。

非公式の定義：スラムに住む貧しい人びとは2つのカテゴリーに分けられる。「小規模な不法土地占拠地」と「ファヴェーラ」。小規模な不法土地占拠

地では、住民は、規則に従っていない、インフラが欠如した土地区画に、不法に住宅を建てている。ファヴェーラでは、住民は、バラックを所有し、それを建て増しする。不法に占拠し建てられた、粗末なあるいはインフラの欠如した住宅はすべて「ファヴェーラ」であるという一般的な理解がある。

以上、これらのファヴェーラの定義に共通することは、ファヴェーラは居住の形態から捉えられているということである。つまり、これらの定義では、貧困あるいは所得レベルは、ファヴェーラを定義する上での一次的な条件ではない。一方、ブラジル政府による「貧困」の定義は、国連も採用する貧困ライン以下の所得層と、最低賃金 (salário mínimo) 3 倍以下の所得層となっており、ファヴェーラへの言及は見られない。つまり、ファヴェーラの定義と貧困層のそれは、別々に設定されており、ファヴェーラが必ずしも貧困層の居住地域と一致するわけではない。ファヴェーラが住宅地の形態から定義されるということは、貧困層が集住している地域であってもファヴェーラとはみなされないということを意味する。参考までに紹介すると、リオデジャネイロ市の都市計画局の 2000 年の統計によれば、ファヴェーラ人口は 109 万 2,476 人、ファヴェーラの世帯数は 30 万 8,581 世帯である。ファヴェーラ人口は、リオデジャネイロ市人口の 18.7% を占める。(Instituto Pereira Passos のホームページより)。この数値は実態を正しく反映しているとは言い難い。なぜなら、ここでのファヴェーラ人口とは、市がファヴェーラとしてカウントした地区だけが対象となっており、しかもファヴェーラの人口は一定しておらず、当局による数値とファヴェーラ自治会による数値が一致しないのが常だからだ。当局にとって、全人口に占めるファヴェーラ人口の割合は少ない方が都合が良いため、公式の統計は常に実態よりも少ない数値を示している。

以上のことから 2 つのことが指摘できよう。1 つは、統計数値で示されるファヴェーラ人口だけが貧困層の人口ではなく、ファヴェーラという名前のついた地区だけが貧困地区ではないということである。実際のところ、リオデジャネイロ大都市圏では、ファヴェーラとみなされない多数の地区にも貧困者が集住しており、社会通念上は、それらも「ファヴェーラ」と見なされ

ている。もう1つ指摘できることは、リオデジャネイロにファヴェーラが出現した時期から（またその直前に貧困層の住宅であったコルチッソが存在した時期においても）、支配層はファヴェーラを都市の住宅問題として認識したということである。そして、その認識が、20世紀を通して見られる、主要な対ファヴェーラ政策の根底を成してきたのである。（この点は第4章で述べる。）

2. 近代化当初のファヴェーラの存在

この章では、19世紀末から20世紀初頭、近代化の象徴としての首都リオデジャネイロの都市化とともに出現したファヴェーラを、当時の支配層がどのように理解したかを見ていく。この時期、リオデジャネイロに流入してくる元奴隷や貧しい農民が集住する場所を、支配層がどのように受けとめたかという問題は、こののち約100年余りを通じて見られる、ファヴェーラと支配層の関係の原型であると言っても過言ではない。支配層による、ファヴェーラをめぐる言説や方策は、時代や経済的・政治的背景によって形を変えて現われるが、そこには、近代化当初から継承されるファヴェーラの捉え方や価値が通底する。本章では、支配層のファヴェーラ観の原型を見ていこう。

2. 1 コルチッソ (cortiço)

リオデジャネイロにおいて、支配層が初めて、貧困層が居住する場所として目を向けたのはコルチッソであった。コルチッソは、19世紀末に制定された「新たなコルチッソ建設禁止条例」の中で、次のように定義されている。「市当局が禁止している建築物。木材あるいは粗末な建材でできた小さな部屋によって構成される集合住宅。しばしば建物の奥や上に設けられる。ベランダと登りにくい階段がある。台所はなく、小さな中庭や廊下があり、共同の便所と洗濯場がある。」もう1つの定義は次のとおりである。「古い建物を不法に木の板で仕切った、家財道具のない小さい部屋。しばしばそれは、屋根裏、天井裏、地下室、台所、納戸、浴室などに及ぶ。一般的に貧困層が住む。屋

内や屋外に洗濯場と便所はあるが、浴室と台所はない場合が多い。」(Valladares 2005:24)

このような劣悪な住環境コルチッソの人口は、当時の市の人口の 11%を占め(Abreu 1987:43)、コルチッソは、支配層から「ならず者」「危険な階級」、社会秩序と道徳を脅かす犯罪の温床とみなされた。さらに、支配層がコルチッソを問題視したのは公衆衛生の点からである。1886 年にはすでに公衆衛生会議のメンバーによる、次のような告発があった。「コルチッソには、空気と光が不足しているだけではない。空間の不足、建物内部の合理的配分の欠如、建材の劣悪な質、排水装置の絶対的な不足、水・便所・排水の不十分さ、鶏と豚との同居、家畜小屋に匹敵するほどの人間の密集、こういったことが、国家の首都のプロレタリア階級の住宅を、哀れみと墮落の巣窟にしか見えない嫌悪すべき豚小屋にしてしまった。ゆえに、リオデジャネイロで黄熱病が流行したら、その発生源はコルチッソである。」(Vaz 2002:34)したがって、コルチッソは直ちに排除されなければならなかった。市は、新たなコルチッソの建設を禁止するだけでなく、既存のコルチッソの取り壊しにかかった。その象徴が、1893 年に実施された、当時の最大のコルチッソ、カベッサ・ド・ポルコ (cabeça do porco) の取り壊しだった。カベッサ・ド・ポルコの取り壊しは、支配層が貧困層の集住する場所を決して放置しないという決意の先駆けであると同時に、その後のファヴェーラ出現と直接的な繋がりを持つのである。

2. 2 ファヴェーラの起源

定説によれば、ファヴェーラの起源は次のとおりである。19 世紀末、取り壊されたコルチッソを追われた人びとや農村から都市に流入する人びと、また元奴隷や貧困者といった人びとは、都心のほど近い、プロヴィデンスシアの丘 (Morro da Providência) にバラックを建てて集住し始めた。1897 年にはすでに集住があったことが記録されている。1898 年には、近くのサント・アントニオの丘 (Morro de Santo Antônio) でもバラック建設による貧困者の集住が

始まっていた。(Valladares 2005:26) これら2つの丘は、この後に一般的となる「丘の斜面にバラックを建てて貧困者が集住する」という形態の最初の例であるとされているが、それ以前の1881年にすでに別の集住地があったという記録もある。(たとえば、Quinta do Caju や Serra Morena。)しかし、ここでは、どの丘が最初かということはそれほど重要ではない。注目すべきことは、この時期にはまだ、「丘の斜面にバラックを建てて貧困者が集住する」という形態は「ファヴェーラ」とは呼ばれていなかったということである。

間もなく、1896年から1897年にバイア州モンテ・サントのカヌードスで繰り上げられた、「カヌードス戦争 (Campanha de Canudos または Guerra de Canudos)」で政府軍との戦いに破れた人びとが、リオデジャネイロに流れ込みプロヴィデンシアの丘やサント・アントニオの丘に住むようになった。そこには、バイアのカヌードスにあった丘、ファヴェーラの丘 (Morro da Favella、当時のポルトガル語表記は1が2つ) に生えていた植物ファヴェーラ・ブランカが生えていたことと、丘の景観とバラックが建っている様子がカヌードスのファヴェーラの丘に似ていたことから、住民は、プロヴィデンシアの丘を「ファヴェーラの丘」と呼ぶようになった。1901年には固有名詞としての「ファヴェーラの丘 (Morro da Favella)」が新聞記事に載っている。ファヴェーラ・ブランカという植物が生えていたかどうかはともかく、カヌードス戦争において、指導者であるアントニオ・コンセリエイロ (Antonio Conselheiro) に追随する住民が集まって暮らしていた「ファヴェーラの丘」という地名が、リオデジャネイロの丘の斜面に形成された新興の集住地の名前の由来であるということは、被支配的集団の抵抗の証という点で興味深い。ブラジルの歴史学者アブレウ (Abreu 1987) によれば、当時の新聞を調べると、1910年ごろまでは「ファヴェーラの丘」は固有名詞として載っているが、1910年代には次第に、「丘の斜面に、貧困者が不法に不規則に集まって住む場所」を一般的に「ファヴェーラ (favela)」と総称するようになった。

カヌードスの「ファヴェーラの丘」が「ファヴェーラ」の由来であるという説自体は興味深いし、また、この説の真偽を検討することも意味があらう

が、本稿では、リオデジャネイロのファヴェーラが、カヌードス戦争との関わりの中で認識されたということの方を重要視したい。丘に定住し始めた住民が、自分たちの住む新天地に故郷の丘の名前をつけたことを起源として、「ファヴェーラ」という言葉が固有名詞から「貧困者が集まって住む場所」を意味する言葉へと一般化され定着したわけだが、その理由は、当時の支配層が、リオデジャネイロという都市空間の中に増殖する「得体の知れない」貧困層の住む空間である「ファヴェーラ」を、カヌードス戦争を引き合いにして理解したからである。なぜ、ファヴェーラはカヌードス戦争と結びつけられたのか。

2. 3 ファヴェーラとセルトンのアナロジー

リオデジャネイロ都市史の研究者であるヴァラダーレス（Valladares）は、ファヴェーラをめぐる言説とファヴェーラ研究史をまとめた著書『ファヴェーラの発明』において、ファヴェーラの由来がカヌードスのファヴェーラの丘にあるということから見えてくる、ファヴェーラとセルトンのアナロジーについて詳細に分析している。彼女の見解を紹介しよう。

増え続ける元奴隷と農村からの流入民といった貧困者たちは、コルチッソの取り壊し後、都市の一等地の背後に位置する丘の斜面に粗末な小屋のような住宅を建て集団で住み、住宅の数も住人の数もどんどん増加する。しかし、支配層はこの事態を理解するための枠組みを持っていなかった。近代化の象徴である、最先端の首都リオデジャネイロにおいて、支配層の目と鼻の先に増殖していく粗末な住宅群とそこに住む貧しい人びと。支配層は、この、近代化にはほど遠い「野蛮」な集団を理解するための枠組みを構築する必要があった。その際に参照可能な文献として大きな影響力を持ったのが、エウクリーデス・ダ・クーニャの『セルトン（Os Sertões）』であった。

エウクリーデス・ダ・クーニャの『セルトン』は、カヌードス制圧を行った政府軍の従軍記者であった著者が、カヌードス戦争を詳細に記録した大著である。第1巻は1902年、第2巻は1903年、第3巻は1905年に出版された。

『セルトン』は単なる事実報告の域を越えた、ブラジル北東部内陸のセルトンの地理から人びとの暮らしまでを網羅した壮大な著作である。多くの研究者は、当時の知識人のほぼ全員がこの大著を読んだであろうし、この著作がなければカヌードス戦争は公式のブラジル史に記録されなかったであろうと指摘する。近代化の恩恵を享受する支配層や知識人は、着々と近代化されているはずの、近代国家ブラジルの成立を信じていたが、クーニャの『セルトン』で詳述されていることはまさに寝耳に水であった。というのは、発展した海岸地域の首都からは窺い知ることの難しい（あるいは知りたくない）、内陸のセルトンの「野蛮さ」と「未開」は衝撃的であり、ブラジルが、近代化にはほど遠い、無知で野蛮な地域と人びとを抱え込んでいるのだということを実感したのである。このような、知識人がセルトンに付した「内なる野蛮」という意味は、リオデジャネイロに出現したファヴェーラに重ね合わされた。

1910 年ごろから、作家やジャーナリストがその著書や記事に「ファヴェーラ」に関する記述を掲載するようになる。彼らは、都市に存在する「未知なる野蛮な世界」を支配層に知らせなければならないという使命感を持っていたように思われる。また、当時の、ファヴェーラに関する文献は、ファヴェーラの住民自身によるものではなく、支配層である知識人やジャーナリストが著わしたものである。それらの記述に見られるファヴェーラ観は、そのまま支配層のファヴェーラ観であると言えよう。支配層にとってファヴェーラは、実体として存在し同じ都市空間を構成するのだが、都市の秩序に相反する別世界であった。この別世界に関する記述には、クーニャが提示したカヌードスの世界を参照し、首都の「悲惨な場所」ファヴェーラを、リオデジャネイロに存在する「セルトン」として描写したものが多数見られる。ファヴェーラとセルトンに見られる類似性は、次の 8 つの点にまとめられる。まず、地形的にアクセス困難な丘であること。そして、丘の住民は上から都市を見渡せ、支配層は貧困層から見下ろされるという位置関係にあること。次に、ファヴェーラは集団による土地占拠であり、その住民は瞬く間に増加すること。3 つ目は、権力（政府、行政および警察）のコントロールが及ばないこ

と。4つ目は、住民の間にはリーダー的人物が居り、ファヴェーラ内には独自の秩序があること。5つ目は、新参者がファヴェーラの同質的アイデンティティに統合されること。6つ目は、反社会的な行為（たとえば盗み、放蕩、無職）を基盤とする経済が成立していること。7つ目は、都市の公共衛生と治安の点から危険であること。8つ目は、土地利用、労働、習慣、納税といった近代的秩序から逸脱していると同時に自由であること。

以上のような、ファヴェーラを理解するための枠組みは、クーニャがカヌードスに関する報告で提示した枠組みであり、「大西洋沿岸地域 vs セルトン」あるいは「近代化 vs セルトンの後進性」といった二項対立的な価値を、リオデジャネイロに当てはめ、「都市 vs ファヴェーラ」すなわち「近代化 vs 野蛮・後進性」という図式が生み出された。この図式は、20 世紀初頭に政府・行政・支配層によって実施されたファヴェーラ政策にも反映された。

3. ファヴェーラ政策の流れ

1920 年代になると、前章でみた 1910 年代のようなファヴェーラの「発見」の時期は終わり、支配層がファヴェーラを問題視するようになった。ファヴェーラを問題視する支配層の考え方のベースには、前章で見たファヴェーラ観が変わることなく存在したまま、様々なファヴェーラを対象とした政策が立案された。支配層はまず、ファヴェーラを公衆衛生と都市の治安維持の点から問題視した。続いて、ほとんどのファヴェーラ政策は、都市計画と住宅政策の枠を越えることはなかった。

1900 年にはすでに、ジョルナル・ド・ブラジル紙 (Jornal do Brasil) が、「一般民にとっての不安である、ならず者と犯罪者のはびこる場所」(Valladares 2005:27) としてファヴェーラを告発している。また同年、ある議員は警察署長に宛てた書簡で、「ファヴェーラはならず者と犯罪者がたむろする場所なので警察による警備を強化してほしいと依頼し、ファヴェーラの理想的な解決法として公衆衛生局に陳情してファヴェーラの不衛生な環境の一掃を提案している」(Zaluar&Alvito 1998:10)。警察署長は報告書に、「当該の場所に一般

民はいないが、あの場所は警備するのは不可能だ。なぜなら、脱走兵や泥棒や下士官のいる所であり、道路はなく、粗末な家は木材で建てられておりトタン板で囲われている。そして丘のどこにもたった一つのガス灯もない」(Valladares 2005:27)。1907 年、公衆衛生学者オズヴァルド・クルス (Oswaldo Cruz) の指揮下、市当局のお墨付きで実施された公衆衛生キャンペーンの狙いはファヴェーラにあった。キャンペーンのポスターには、「ファヴェーラの丘」を模した醜い男の顔が描かれており、赤十字マークの腕章をした身なりのきちんとした衛生局係官が、男の頭髪を櫛ですくと中から汚い身なりの住民がぼろぼろと何人もこぼれおちる様子が描かれている。

1920 年代になると、公衆衛生学者だけではなく都市計画の研究者やエンジニアが行政と深く関わるようになり、様々な都市化プロジェクトが実施された。この時代の都市化プロジェクトには次のような共通点があった。都市の機能と支配層の居住地域のインフラ整備を目的としたため、たとえば、トンネル建設、道路拡張、海岸の埋め立てといった公共工事が行われる度に、既存のファヴェーラが撤去され住民は立ち退かされた。また富裕層人口の増加に伴い空前の不動産建築ブームが訪れ、リオデジャネイロ市の南部 (Zona Sul) は富裕層の住宅地区として開けていった。このような公共工事や不動産建築は、大量の雇用を創出したため、安価な労働力がますます流入し、結果的にファヴェーラ人口とファヴェーラ数の増加を招いた。

1930 年代、ブラジルは、民族主義的な輸入代替工業化と、国家・国土・国民の統合を国家主導で進めた。これに伴い、大量の工場労働者が生まれたが、ヴァルガス大統領はこの労働者の支持を得るために、労働者を保護する様々な措置を取った。このこともリオデジャネイロのファヴェーラ人口と工場労働者の増加を促した。同時期、リオデジャネイロ市の人口は約 2 倍増加し、都市空間が拡大した。都市全体が住宅難であったこの時期、政府は二重構造の住宅政策を取った。それは富裕層向けの高層住宅の建築を推進する一方、貧困層向けの賃貸住宅不足を放置し、かつファヴェーラのような不良住宅の取り壊しを促すといった政策だった。その結果、「富裕エリート層が高層住宅

建設の熱に浮かれている間、陰では静かにゆっくりとファヴェーラの増殖が進んでいたのである」(Vaz 2002:131)。

初の公的なファヴェーラ政策は、1933 年の貧困層向け住宅政策だといわれる。それは市の土木事業条例であり、そこでは、ファヴェーラが公式の市の行政地図に掲載できない「逸脱」であるので撤去が最善策であるという提案がなされている。1937 年の条例では、既存のファヴェーラ内での新たな住宅の建設が禁止され、住民の立ち退きとファヴェーラの撲滅と代替住宅地の建設が制定された。それを受けて実施されたのが、後の「パルケ・プロレタリオ (parque proletário)」と呼ばれる工場労働者向け集合住宅地の建設である。1941 年から 1944 年に建設された 3 カ所のパルケ・プロレタリオには、4 千人あるいは 7 千人から 8 千人が収容されたと言われるが (Burgos 1998:27、Valladares 2005:61)、当時のファヴェーラ人口が約 25 万人から 30 万人と推定されることを考えると、政府が真剣にこの政策を進めていたとは思えない。

1930 年代から 1940 年代末までのファヴェーラの増加率は数倍の勢いとなり、こうなって初めて政府は行政による公式のファヴェーラ調査に乗り出した。初のファヴェーラ・センサスは 1948 年に実施され翌年出版された。その中に次のような説明文がある。「ファヴェーラでは黒人や混血が大半なのは驚くにあたらない。遺伝的に遅れており志に欠け、近代社会の求めるものに適応不能な者は、我々の都市的中心地において下層民を構成するのである。」「人間の生物的特徴と能力は何世代にもわたって継承され、人生を決定する。...たとえば、黒人は与えられた自由を活用することもできず活用の仕方也不知道、経済的に豊かになることもできない。彼らは生まれ変わっても怠け者であり.....。」(Valladares 2005:63 より再引用)。このような、貧困者に対する偏見と人種に関する優生学的見解は、支配層の間では根強かった。

1940 年代後半から 1960 年代前半、ブラジルは、民族主義的工業化が進み、政治的には立憲体制に復帰しポピュリズムが継続された。1950 年代後半からは、左翼的思想が知識人の間に浸透し、「民衆」との連帯の推進がポピュリズムの大衆動員と結びついた。また急速な経済成長の反動でインフレを招いた。

リオデジャネイロでは、労働者の賃金が低下し地価が高騰し、富裕層にも貧困層にも住宅難となり、ファヴェーラ人口が増加した。1945 年制定の労働関係法典や 1960 年制定の社会保護基本法は、労働者の保護を掲げたが、適用の対象は制限され、インフォーマルな被雇用者は対象に含まれなかった。このような状況において「社会的に排除された者」が組織化される可能性が高まり、その文脈においてファヴェーラ住民は、ポピュリズム的大衆動員を目指す勢力と、反帝国主義的左翼思想勢力の双方から、連帯すべき「民衆」として注目され、様々な政治勢力がファヴェーラに入り込んだ。カトリック教会もまたファヴェーラ住民への物質的・道徳的援助を行う活動を展開した。ファヴェーラへのカトリック教会と共産党の浸透に危機感を持った市政府は、1956 年、「ファヴェーラおよび非衛生的住宅改善特別サービス」を設立し、ファヴェーラのインフラ整備によって住民をコントロールしようとした。このような、1940 年代後半の動きから理解できることは、支配層が、ファヴェーラを、近代化を阻害する都市の汚点として捉えるだけではなく、ファヴェーラに政治的な意味を見出すようになったことである。したがって、ファヴェーラを撤去するといった排除型の政策も存続したが、同時にファヴェーラ内のインフラ整備による住民の政治的取り込みが見られるようになったのである。

1960 年代から 1970 年代前半の主要なファヴェーラ政策は、ファヴェーラ撤去政策（remoção das favelas）である。立ち退きの対象となったファヴェーラの住民は、郊外や都市周辺地域に建設された、上下水道と電気が整備された団地や低所得者向け住宅地に移動させられた。政府の考え方は次のとおりである。「ファヴェーラは都市の歪んだ空間であり社会からの逸脱者が住む場所である。彼らが基本サービスの恩恵を受けることができないのは彼らが税金を納めないからである。彼らに必要なのは、社会的・道徳的・経済的・衛生的リハビリである」（Burgos 1998:34）。1962 年から 1974 年の間に撤去政策の対象となったのは、80 のファヴェーラの推定 13 万 9,218 人、あるいは、1968 年から 1973 年の間に 9 万人が立ち退いたとされる（Gay 1994:21）。しかし、同じ時

期のファヴェーラ人口は増加しているのである。撤去政策は当然ながらファヴェーラ住民には非常に不評で立ち退きに対する抵抗も根強かったが、政府は反対運動を徹底的に弾圧した。しかし、1970年代半ばになると撤去政策そのものが中止された。その理由は、すべてのファヴェーラ住民の立ち退きが物理的に不可能であること、立ち退き先の都市周辺地域に雇用がほとんどないこと、住宅ローンを払わない世帯が続出したこと、そして何よりも財政難であった（Gay 1994:19-21）。

1970年代後半から民政移管される1985年までは、政治勢力の拡大を狙いとしたファヴェーラ政策が見られたが、それほど多くはなかった。数少ない政策に共通するのは、ファヴェーラの中のインフラ整備と住民のための基本サービスや医療・教育の提供である。本来の狙いが政治勢力の拡大にあるため、リオデジャネイロでも有名で大規模ないくつかのファヴェーラを利用し、対立する政党の基盤の弱体化を目指してプログラムが実施された。

民主化されてからの主要なファヴェーラ政策は、ファヴェーラ＝バイホ（Favela-Bairro）という、ファヴェーラを正式な行政区分であるバイホとして認め、住民の土地所有権を認めるというプログラムである。住民は、住民税や固定資産税を納めなければならないが、都市のフォーマルな一員として統合される。このプログラムの対象となった159のファヴェーラは、もはや「ファヴェーラ」ではなく「バイホ」となり、道路の舗装、上水道の設置、排水設備の整備、雇用の創出、新築住宅への移動といったことが実現された。また、近年、盛んに実施されているファヴェーラ政策は、NGOとの連携が多く、ファヴェーラのインフラ整備よりむしろ住民のエンパワーメントや雇用の創出へと重点がシフトしている。

以上、支配層によってファヴェーラが問題視された20世紀初頭から今日までのファヴェーラ政策を簡単に振り返った。支配層が、ファヴェーラを、都市計画や住宅政策の観点からしか捉えない時代が長く続き、その後、政治勢力の拡大を目的としたプログラムが実施され、近年になってやっと政府はファヴェーラ内部のインフラの整備や住民のエンパワーメントに取り組むよう

になった。この間、ファヴェーラ住民は受け身でいたわけではなく、支配層から獲得できるものは獲得し、支配層の思惑に反してファヴェーラは増え続けてきた。（この点については稿を改めて考察したい。）支配層は、20世紀初頭に、近代化にそぐわない「内なる他者」としてファヴェーラを認識してから今日まで常に、ファヴェーラにどのように対処し、ファヴェーラをどのようにコントロールするかに頭を悩ませてきた。ファヴェーラが生み出される理由は、貧富の格差と植民地時代から続く不平等な社会構造にあるのだから、そこにメスを入れることなくしてファヴェーラの解消は不可能であろう。しかし、支配層はファヴェーラを排除することはできず、ファヴェーラとそこに住む貧困層を問題視し近代化から排除しながらも、ファヴェーラを「非近代」として価値づけることを通して、自己の「近代性」を確立するという、ファヴェーラとの両義的な関係を築いてきたと言えるのではないか。次章では、ファヴェーラの存在が支配層の自己の確立に深く関わっているということを、ブラジル文化の視点から考察する。

4. ブラジル文化におけるファヴェーラの意味

近代国家の成立には国民が共有するナショナル・アイデンティティ、すなわち国民文化の形成が不可欠である。国民は、公式の歴史と国民文化を共有することで、同質的な「・・・人」意識あるいは「・・・文化の持ち主」といった集団としての自己を形成する。本章では、ブラジルの支配層が「ブラジル文化とは何か」という問いに対する答えを模索し、ブラジル国民文化が形成される過程において、「内なる他者」であるファヴェーラをどのように位置づけたか、を考える。

前章までで見た通り、支配層は「内なる他者」を、近代化を阻害する、ブラジルの後進性の原因とみなしたが、ナショナル・アイデンティティの模索においては、「内なる他者」の存在を肯定的に認めた。結論を先取りして述べるなら、現実の社会においては、後進性の原因として「内なる他者」を否定しながら、ナショナル・アイデンティティの核を成す「ブラジルの個性」と

いう点では、「内なる他者」を肯定し理想化したのだった。独立以来、支配層は植民地時代的な伝統社会に結びつくような旧態依然としたものを拒否し、ブラジル社会のヨーロッパ化を進めた。共和制成立後の19世紀末から20世紀初頭になると、ヨーロッパ化の傾向は一層強くなったが、同時に、支配層は、ヨーロッパに追随しない「脱ヨーロッパ」をも目指した。その「脱ヨーロッパ」の動きは、文化の領域において模索され、「ヨーロッパには存在しない、ブラジルにしかないもの」、すなわち「ブラジルの個性」(ブラジルらしさ、ブラジリダーヂ(brasilidade))の「発見」に繋がるのである。この時支配層が「発見」した「ブラジリダーヂ」とは、植民地時代以来ずっと、彼らがブラジル社会・文化から排除しようにも排除できずに抱え込んできた、「内なる他者」の文化的実践だった。ここに、ブラジルの近代化の抱える矛盾が見られる。つまり、近代化の過程において、「内なる他者」を後進性の原因として近代化から排除しながら、近代化の求める国民文化の形成においては、「内なる他者」を理想化しヨーロッパ文化からの脱却のために利用した。理想化された「内なる他者」とは、先住民、黒人、混血の人びと、貧しい農民、非識字者、貧困者といった被支配的集団とその文化的実践であった。その1つがリオデジャネイロのファヴェーラとその住民である。第1章で見たように、支配層はファヴェーラを近代都市に内在する「野蠻」とみなしたが、ファヴェーラの人びとの日常的実践は、支配層が「発見」した「ブラジリダーヂ」に合致すると考えられた。そこで「発見」されたのが、ファヴェーラの黒人や混血の人びとが生み出した音楽サンバだった。

その典型的な例が、有名なサンバの楽曲「ブラジルの水彩画 (Aquarela do Brasil)」である。この曲は、ヴァルバス大統領が国民の文化的統合を目指して実施した、ナショナリズムを高揚するサンバのコンクールの優勝曲である。1939年にアリ・バホーズ (Ari Barroso) によって作詞作曲された。曲の形式はサンバ (正確にはサンバ・エザルタサン(samba-exaltação)) であり、歌詞はブラジルの個性と魅力を称賛する内容となっている。「ブラジル、私のブラジル、それは魅惑的な混血のムラート。」「過去のカーテンを開けて、奥地から

黒人の乳母を連れ出そう。コンガード（アフリカ由来のダンス）にコンゴ王を出そう。」「ブラジルは素晴らしい国、じっとこちらを見つめる魅惑的な混血の若い娘。」「美しく小麦色の肌をしたブラジル。私のブラジル。サンバとパンデイロ（打楽器）の国。」このように、歌詞では、黒人やアフリカ的なもの、混血、トロピカルな風景、サンバといった事柄が、ブラジルらしさを構成する具体的なものとして描かれている。これらはブラジルの魅力として美化されているが、現実には被支配的な社会的地位に置かれた人びとであり、支配層によってブラジルの後進性と重ね合わされる人びとである。

元々サンバは、ファヴェーラの人びとが生み出した音楽であるが、支配層がそれを受容することによって「ブラジリダーヂ」を具体的に表象する音楽になった。これによって、ファヴェーラとその人びとは、「サンバを生み出した場所と人」として、ナショナルな文化的同一性に取り込まれた。ブラジル的人类学者ヴィアナ（Vianna）が著書『サンバのミステリー』で指摘するように、ファヴェーラの人びとが生み出した、混血の音楽サンバは、支配層によって「発見」されナショナル・アイデンティティの具体化に利用されたが、その過程で、支配層と、ファヴェーラのサンバ作詞家・作曲家・演奏家（サンビスタ）との間には「文化の」交流があった。サンバがファヴェーラの境界を越えてナショナル・アイデンティティの具体的表象になったことは、支配層による受容がなければ不可能だったのだが、ファヴェーラのサンビスタたちは一方的にサンバを召し上げられてしまったわけではない。支配層はファヴェーラの中に分け入って（ファヴェーラを登って）サンバを「発見」したのではない。支配層とサンビスタと出会った場所は、支配層の領域とファヴェーラの領域の臨界に当たる、ファヴェーラの丘を下ったところにある、（ファヴェーラの丘の登り口付近の）広場や歓楽街だった。歓楽街の社交パーティー場の建物の裏庭で、ファヴェーラのサンビスタが奏でるサンバの音楽と踊りに支配層が魅了され、当時、「発見」されたブラジリダーヂがサンバの中に見出された。換言すれば、ファヴェーラのサンビスタは、支配層によって受容されるという、一見、受け身的なやり方で、彼らの表現文化である

音楽を、国民音楽（国民文化）になし得て、国民文化の生成に参画したと言えよう。このように、支配層とファヴェーラの「文化の」交流を通して、支配層は「内なる他者」を文化的に理想化したのである。

5. 1990年代以降の治安悪化による都市空間の再編：支配層とファヴェーラの新たな関係

1980年代後半から1990年代後半にかけて、ブラジルは、不況、対外債務の増大、ハイパー・インフレ、失業、貧富の格差の拡大に苦しんだ。これと平行するように、犯罪組織が台頭し都市の治安が悪化した。リオデジャネイロでも、賭け事やくじの胴元として勢力を増した犯罪組織が巨大化し、そこに繋がるように麻薬密売に関わる組織が多数現れた。「この局面に対応する方針を何ら出さなかった市当局は、これらの勢力を野放しにし、都市の治安悪化は深刻になった」(Burgos 1998:43)。政府がファヴェーラを等閑視していた1980年代、犯罪組織はその資金力によってファヴェーラのインフラを整備したり娯楽のスポンサーになるなどしてファヴェーラにその勢力を浸透させていった。

19世紀末以来、支配層は常に、ファヴェーラを問題視し、排除しながらも必要とするという両義的な関係を築いてきた。ブラジルの人類学者カルデイラは、支配層は貧困層に対して「依存しながら避け、親しくありながら信用しないという曖昧な関係を築きながら都市空間を分け合ってきた」と指摘する (Caldeira 1996:311)。それは、前章までで述べたように、社会問題として問題視しながら文化的には理想化するという二重性をファヴェーラに持たせるといふ、支配層の、ファヴェーラとの関係である。

しかし、1980年代以降の犯罪組織の台頭と治安の悪化は、従来のような、支配層とファヴェーラの、ある意味「相互依存的な」関係に大きな変化をもたらしたと考えられる。つまり、治安の悪化によって都市空間に変化が生じた。支配層は、ファヴェーラと犯罪を同一視するようになり、犯罪から身を守る生活空間を創出するようになる。犯罪から身を守る生活空間とは、高度

なセキュリティーが整った住宅の中で生活し、仕事やショッピングや娯楽のための外出にはセキュリティー完備の自動車で移動する。都市空間をファヴェーラの人びとと分け合うことはなくなり、支配層は、孤立した要塞化された空間の中に閉じこもる (Caldeira 2000)。要塞化された安全な空間の外側には、ファヴェーラのような犯罪にまみれた「野蛮」な空間が広がり、支配層の空間は包囲され浸食されるかもしれないという恐怖にさいなまれる。近年の治安悪化は、このようなイメージを支配層の間に定着させている。

しかし、実際は、治安悪化の被害者は支配層だけではない。彼らが加害者と重ねて見るファヴェーラに住む人びとこそ被害者であると言える。ファヴェーラの人びとの間でも最も関心が高く不安な事柄の1つが治安の悪さである。彼らの多くが、「犯罪組織が身近に存在することは決して好ましくはない。しかし、近年、コミュニティの治安悪化を促しているのは、ここを牛耳るギャングというよりむしろ麻薬密売掃討を掲げて入ってくる警察の特殊部隊だ」と言う。

誰が真の被害者かというのはここでは問題ではなく、支配層もファヴェーラの人びとも大きな不安と恐怖を抱いているということが問題である。つまり、今日のリオデジャネイロにおいて、犯罪と暴力は、そこで暮らす人びとにとって最大の関心事の1つであり、支配層が要塞化された空間を固守することによって都市空間が再編され、その都市空間の再編は、支配層とファヴェーラが分断され、それぞれ排他的な関係を築くという、両者の新たな関係を強化すると考えられる。

おわりに

本稿では、支配層がファヴェーラをどのように捉えてきたかを概観することによって、支配層のアイデンティティの形成とブラジルにおける近代化の1つの有り様を考察した。支配層は「内なる他者」すなわち「非近代的なもの」を抱え込みながら近代化を進めてきた。ファヴェーラは、ブラジル社会において劣位に置かれ否定されながら、ブラジル文化においては肯定され、

ブラジル国民文化の重要な表象としての意味を付された。

では、「内なる他者」とみなされてきたファヴェーラの人びとはどのような近代化を経験してきたのか。彼らは、どのようなやり方で、都市空間の中でファヴェーラという彼ら自身の領域を獲得してきたのか。この点については、稿を改めて考えたい。

参考文献

Abreu, Maurício de Almeida

1987 *Evolução urbana do Rio de Janeiro*. Rio de Janeiro: Iplanrio/Zahar.

Burgos, Marcelo Baumann

1998 Dos parques proletários ao Favela-Bairro: As políticas públicas nas favelas do Rio de Janeiro. In *Um século de favela*. Alba Zaluar e Marcos Alvito (org.), pp.25-60. Rio de Janeiro: Editora Fundação Getúlio Vargas.

Caldeira, Teresa Pires do Rio

2000 *City of wall: Crime, segregation, and citizenship in São Paulo*. Berkeley: University of California Press.

1996 Fortified enclaves: The new urban segregation. *Public Culture* 8, pp.303-328.

Gay, Robert

1994 *Popular organization and democracy in Rio de Janeiro: A tale of two favelas*. Philadelphia: Temple University Press.

UN-Habitat

2002 *Slums of the world: The face of urban poverty in the new millennium?*. New York: UN-Habitat.

Valladares, Licia do Prado

2005 *A invenção da favela: Do mito de origem a favela.com*. Rio de Janeiro: Editora FGV.

Vaz, Lilian Fessler

2002 *Modernidade e moradia: Habitação coletiva no Rio de Janeiro, século XIX e XX.*

Rio de Janeiro: 7 Letras.

Vianna, Hernano

1995 *O mistério do samba.* Rio de Janeiro:Zahar Editor e Editora UFRJ.

Zaluar, Alba & Marcos Alvito

1998 Introdução. In *Um século de favela.* Alba Zaluar e Marcos Alvito(org.), pp.7-24. Rio de Janeiro: Editora Fundação Getúlio Vargas.

インターネット資料

Instituto Municipal de Urbanismo Pereira Passos のホームページ

<http://www.rio.rj.gov.br/>のデータバンク "armazém de dados"

Tabela 70 "Habitação-Domicílio, População residente em favela, 1991/2000". (2009 年 2 月 4 日アクセス)